

## 遊ぶこと・食べること・学ぶこと

京都府舞鶴市  
ルンビニこども園  
園長 楠 文範  
保育教諭 山崎 美穂

### 1 はじめに

舞鶴市の人口は、令和5年（2023年）12月1日現在76,514人で平成8年（2008年）90,001人から急激な減少の推移があった。地方における小都市の典型のような、少子高齢化が顕著な町で、旧軍港を契機に市街地が形成され、海上自衛隊の基地がある東地区と天正年間からの城下町である西地区に大別できる。西地区の市街地の70%は海拔1mという環境で、河川の洪水がしばしば住民を苦しめてきた。

風土は、高温多湿、晴天率が低い地域で、冬季は積雪がある。本園は、西地区の旧市街地にあり、海まで最短600m、城の堀を兼ねた高野川まで70mというなかなか過酷な環境に身を置いている。

出生率は令和4年、1.84で京都府でも高い水準にあるにもかかわらず人口は減少している。本園の周辺は特に減少化が顕著で、今後の事業運営にも大きな影響があると思慮する。現在園児数132名（うち1号認定児童定員12名 職員35名）である。

#### （1）理想とする姿

本園の理念は「子どもの命を守り、子どもの心を育て、子どもの成長を見守る」ことである。この理念を現実のものとするため、保育の在り方を明確にする必要がある。日々の保育を推進する為、理想の姿を「遊ぶこと・食べること・学ぶこと」とした。

平成17年（2005年）7月27日、園舎の大規模修繕とともに730㎡（220坪）の園庭が確保できた（現在は1,100㎡、うち畑は約200㎡）。当時樹木は、クスノキが2本、柿3本、藤棚（下は砂場）、コンパンの大型遊具（全長25m）他一基、中型雲梯、鉄棒。炎天下の中で新たな保育が始まった。

#### （2）理想実現のための助け舟

夏の夕方、西隣の植木屋さん（田路造園）が突然、「こんな炎天下で、子どもら遊んで大丈夫か、山に持っている木を欲しいだけあげる。移植費はもらうけど、どうや。ただし、仕事の合間でこの冬に移植するから、予定は立たんよ。」と提案してくれた。

かくして、クスノキ（樹高3m 4本）、ケヤキ（樹高4mから5m 5本）、白樺4本。桜とウバメガシ4本は別の友人から。現在の森の原型は2009年にはほぼ出来上がった。すべてただ（無料）。移植に伴う金額1本おおむね3万円から10万円程度。クヌギのみ、8本自前。ほんとうに有難かった。



樹木は、確実に成長し、現在、最も大きなケヤキは樹高 8mに達している。樹木は森を形成し、夏季の強烈な日差しを遮って、子どもたちを守っている。昨夏 8 月 1 日炎天下 14 時 38.5 度、森の中 32.7 度。ウェットタイプのミストを加えると更に森の中の温度は下がる。年々夏の気温の上昇が報告されている。園庭での遊びの形態が大きく変わる可能性も視野に入れている。(左の写真は現在の畑から見た森)

## 2 目的

本園のエントランスには、倉橋惣三先生の園庭に関する記述を、掲げている。出典は、昭和 23 年の保育要領の一説である。実際はなかなかの長文であるため要約して紹介する。

出来るだけ自然のままで、草の多い丘があり、平地があり、木陰があり、くぼ地があつて、幼児がころんだり、走ったり自由に遊ぶ事の出来るような所がよい。夏は木陰となり、冬は日光が十分当たるように落葉樹を植えるとよい。子どもは高い所に上がるのが好きである。運動場の一角に小山を築き、その中に直径半メートルくらいの土管を敷いてトンネルを作ると、子どもは、その中をくぐり、歩けるのでよろこぶ。幼児にはできるだけ自然の美しさに親しませたい。日当たりのよい運動場の一部を花畑、菜園として野菜や花を作り、それを愛育するようしむける。池を作って金魚、こいを飼育し、カエルやおたまじゃくしを観察させ、また夏にはこれをプールにする。』

私たちが注目したのは、運動場という表現ではあるが、いわゆる校庭とは一線を画し、子どもが、自分の好みにあった活動がいつでもできる環境構成の手段であると、受け止めた。

倉橋惣三先生の示す通りやれば子どもたちがどのように変容するか、確かめたいと考えた。

## 3 実践

### (1) 倉橋惣三先生の示す通りやってみよう

園庭は、成長を促すステージで、子どもたちが、しっかり食べて、安心して遊び、学びを自ら広げるための手段である。

園庭を整備する上で、子どもたちの声を最大重視し、『保育者も自分の思いを語り合ってその方向を徐々に定めていった。』

『いけとかわがほしい』→その冬、早速作ってみた 井水は十分ある

『ぼくら、もうあそばんで』→大型遊具は、五分の四を撤去した

『くだもののきをうえようよ』→ブドウ・ミカン・丹波栗

『パンもピザもつくってたべるって、ええなあ』→石窯のおかげ

『とれたサツマイモで、やきいもがたべたい →職員と園児とで石釜を作った

『おなかいっぱい、イチゴたべたいなあ』 →令和 3 年 140 株植えた

『くすりまかんといて、むしがしぬ』→殺虫剤を噴霧できない



(2 歳児が作ったピザ)

## (2) 子どもたちの興味を知る手立て

園舎のポイントは二階のテラスを屋上緑化していることである。園庭に加え二階の緑化したテラスがあることで、子どもたちの活動は多様な姿を見せる。

中央部にあるウッドデッキは、園庭と園舎をつなぐ働きをする。ここで子どもたちは様々な表情を見せる。また、乳児と幼児の交流がよくみられ幼児は乳児や1歳児2歳児を大切にすることが顕著に見受けられる。さらに、気候のいい季節には、デッキで昼食をとることもある。

(園舎・園庭配置図)



(デッキの植込みは学びの場)

「朝の自由遊びが始まる時、我々保育者は何を見るか」という問いをいただいたのは鳴門教育大学の木下光二先生である。園庭に出た子どもたちは、最初に行くところが、最も興味を持っているところであると聞いた。

## (3) この観点で見たとき見えてきたこと

### エピソード1

Yちゃん 「せんせい、サツマイモのはがおおきくなっている。ツルがしっかりしてきた。すごいな。みずをしっかりとあげて、おひさまがたくさんあたったら、どんどんおおきくなるんや。でも、ほんに、『あまりみずをやりすぎてはいけない』とかいてあったよ」

### エピソード2

K君 「これもサツマイモ?」「4だいのめのおいもなん?」  
S君 「みんなでおせわしてきたおいもが、こんだけなくなっちゃったってこと?」

K君 「5だめもおせわしたら、またおいもができるの？」  
「じゃあ、まつぐみさんに育ててもらったら、また、おいもができるんや」  
「そのあと、たけぐみさんもってすご〜い」



水栽培して得た4代目のサツマイモをめぐって、5歳児の会話がかぎりなく進んでいく。S君は、代を重ねるごとに長いサツマイモが出来るのではないかと仮説を立てているようだ。K君は自分の弟もそのうち継承してきたサツマイモを育てる日が来ることを思い浮かべていた様子がよく見える。収穫したサツマイモは、子どもたちの声を聞きながら、サツマイモ巾着、コロッケ、さつま汁やサツマイモパンに調理されて、子どもたちのおなかに収まって行った。

この二つのエピソードは、どちらも年長児のものである。エピソード1のYちゃんは冷静にサツマイモが成長する姿を観察している。水やりと日光が必要としながらも、水のやりすぎはよくないことが分かっている。

エピソード2は水耕栽培で、ツルを増やして4代目を数える。そのツルで栽培したサツマイモは、細長いサツマイモであった。繰り返し使ってゆくうちに、できるサツマイモは小さくなってゆくのではないかと考えている様子がうかがえる。また、自分たちの後も、水耕栽培したサツマイモが継承されてゆくことを予想している。畑での栽培を軸とした保育は、保育指針に記載されている「食を営む力」に留まらず、この営みは「主体的、対話的で深い学び」そのものである事が理解できる。



(3代目のサツマイモ)



(棄損食材は宝の山)

#### (4) サツマイモは8回美味しい

前年に収穫したサツマイモを水耕栽培し、次の年の苗を作る試みは一昨年からは続けてきた。

本園では、棄損食材も観葉植物もミニトマトのわき芽なんでも水耕栽培をしてきた。サツマイモの苗を作る試みもそのような経緯から生まれた。大きくなった前年からの苗を丁寧に、大切に植えて育ててきた。毎日の水やりは欠かせない。大きく成長するサツマイモを、毎日観察して記録する。先ほどのエピソードは、このような環境から生まれたものである。



(ツルの回収)

第二次世界大戦中、極度の食糧難に陥った我々の先輩たちは、学校の校庭を

サツマイモ畑に変え、芋はもちろんのこと、ツルをお粥に入れたり、汁の具として飢えをしのいでいた経験を持っている。さつまいものツルにはそのような記憶が偲ばれる。この事実を正確に伝えることは、年長児には少々困難であろう。

イモツルをそのまま食べたら、美味しくなかったが、味を付けたら美味しくなった。家庭へのイモツルレシピの持ち帰りで、保護者からもらった手紙は、子どもを通じて園と家庭が食に関する共通の話題で繋がりを意味する。

「たべるだけではもったいないな～」一人の子どもの声から、「イモのツルで遊んでみよう」ということになり、「れんぞくリース」「リースにどんぐりをかざる」「ツルをみつあみにしたい」という希望が出たので、私も少し手伝った。子ども



(ツルの掃除)



(どんぐりを飾ったリース)

の発案に驚いた作品は、10月末のお泊り保育を想定したランプのシェードを作ったことである。その夜、神崎まいまいハウスの遊戯室が幻想的な雰囲気にも包まれた。さらに、三つ編みをしたツルは、クリスマスの飾りや、新年の飾りに用いることが出来た。

この取り組みを通して『思いやり・安定した情緒・自信』を感じることが出来る。夢中になっての遊びは、多くの学び発見を期待できる。『言葉による表現、伝え合い』『試行錯誤』『工夫』は、子どもたちにとって『思考力・判断力・表現力』の基礎を養う。畑は思いがけない発見や学びをごく普通に見つけることが出来る場である。

この取り組みを通して『思いやり・安定した情緒・自信』を感じることが出来る。夢中になっての遊びは、多くの学び発見を期待できる。『言葉による表現、伝え合い』『試行錯誤』『工夫』は、子どもたち



(ランプシェード)

## (5) 畑からの作物を収穫

昨年の夏季の畑の作物は、本園の食育計画にそって、トマト (80 株)・ナス (鉢 10 株 8 株)・ピーマン (鉢 4 株)・きゅうり (鉢 3 株)・里芋 (畑 6 株)・大豆 (180 株) ほかフェンスを使った袋での吊り下げ栽培・スイカ 4 株・メロン 4 株・ど根性カボチャたちであった。年長児は、一人一鉢、自分の好きな野菜を、子ども用の園芸手引書や職員に尋ねながら育てている。毎日のように、たくさんの収穫があり、朝収穫した野菜は、そのまま調理室へ運んでいる。

「ちょうりのせんせい、おねがいします」・・・「何にしようかな、美味しそう」本園の収穫時期は調理



室の協力なしに、前に進まない。毎年大きな柿の木の葉は、秋になると美しい様相を見せる。「本で見たけど、柿の葉寿司、知ってる？」柿の葉の落ち葉を集めていた時の会話だった。数年前に簡単に作った経験はあったが、最近では作っていなかった。早速調理室に、「お寿司のご飯作ってくれる？」と聞いたら、3時の捕食に間に合うように作ってくれた。写真が、今年の年長児の柿の葉寿司。こんなことがと



っさにできる環境が嬉しい。これも園の文化になってくれることを願う。

## (6) いのちの日

11年前、一人の女の子の「タコは赤くない」というつぶやきから始まった。友人の魚屋さんから貰った大きな真蛸(3匹)をたらいに入れ観察してその結果食べたことから、命を問う日を設定した。本園のいのちの日は、現在では鰯を使って行っていて園の行事の中でも、最も重要な日である。幼児クラスの子どもたちの前で、鰯を料理することは一見残酷なシーンを見せることになる。

しかしながら、普段何気なく食べている魚類・肉類すべてが活着しているいのちを頂戴している現実を理解してほしいと願っての行事である。

「すごいち」「においもすごいし、おなかのなかってぼくらとおなじなの?」「かわいそう」「だいにたべんとあかんのや」「いのちをいただいているんや」これらは、子どもの率直な感想である。その後、皆で大きな声で、「いただきます。」



## (7) 子どもの声を聞きながら

リクエスト昼食、「どんなものが食べたい?」子どもたちはいつも調理室の先生に、食べたいものをそれぞれ勝手気ままに伝えている。いい天気、今日は2階の芝生で食べよう。



(花を飾ったケーキ)

11月中旬、年長組の男の子が、砂と小菊で my ケーキを作っていた。「こんなケーキ食べたいね」と調理室に伝えていた。12月22日ほんとにそっくりなケーキが子どもたちの前に姿を現した、調理室に感謝を込めて語りあった嬉しいひと時であった。私はこの日不在であった。後日、年長児は

A「えんちょうせんせい、この、まえな、Kちゃんがつくったすなのケーキそっくりな、ほんまのケーキをちょうりしつせんせいがつくってくれたんや。」

園長「へえ」

A「むちゃくちゃおいしかった。びっくりしたで!!!」



(砂で作ったケーキ)



(本物のケーキ)

## (8) 育っている子どもたち

昨年9月13日午後の自由遊びの時間に年長児がデッキに集まって、論争をしていたので、そっと近づいて聞いていると、昆虫が大好きなS君が、大切にしていたカマキリにバッタの幼虫を与えたことから、論争が始まったようであった。子どもたちの視点の違いを感じることが出来る瞬間であった。(成果を感じたとき、保育者はたまたま嬉しい)



(バッタを食べているカマキリ)

### エピソード3

S君に、Y君が、猛烈に抗議をしたことから始まった。

Y君「Sちゃん、バッタがかわいそうやろ。  
なんでこんなことするの。」

S君「でも、くさのなかでもカマキリはバッタを  
たべているやん。なんであかんの？」

Y君「そのバッタのあかちゃん、みんなでだいに  
してきたのに。かわいそうやろ。」

Aちゃん「でもな、わたしら、まいにちおにくも  
おさかなもたべているよ。Yくんかわ  
いそうっていうけど。みんな、たべん  
と  
いきていけん。Yくんもいっしょやろ。  
だから『いただきます』って、いってる  
やん。」

H君は無言。

K君はこちらを向かないで、背中を向けたまま  
で自分が可愛がってきたバッタを撫でていた。

Sくんは、無言だった。

年長児は、この一年いろんな意味で一人一人それぞれの成長を遂げてきた。このエピソードは年長児たちが間違いなく育っていることを表している。その姿を目の前にして嬉しく思った。

S君もY君もK君もとても優しい子どもである。それぞれが全く違った視点を持っていることがよくよく分かる。その中で、Aちゃんだけは、冷静にこの会話を聞いていた。しかも我々人間の日々の所作を自分の問題として判断したうえで、「いただきます」の意味まで伝えたことに、驚きであった。食べるという行為は、人間だけの行為では無く、生き物全てに、あてはまる行為であることが、このエピソードでよく理解できた。

保育者として子どもたち自身が、言葉による伝え合い・自分なりの表現・表現する喜び・思いやり・葛藤など様々に『学びに向かう力』を表現する姿に触れることは、誠に幸せなことと改めて嬉しく思う。

## 4 成果と課題

### (1) 倉橋惣三先生の園庭についての記述を再現した結果

私たちの理想の姿「遊ぶこと・食べること・学ぶこと」これを実現するために、保育要領にある運動場（園庭）を可能な限り忠実に本園の園庭に置き換えてみた。この園庭で子どもたちは、少々の雨でも、雪が降っていてもごく普通に毎日遊んでいる。午前中の自由遊びの時間は、乳児から年長児まで一緒に園庭で年齢に応じた遊びを展開する。年長児がよちよち歩きの乳児を突飛ばすことは無く、むしろ大切にする光景に毎日出会っている。思いやりってこんな環境から自然に生まれて来るものなのか、本園では思いやりという行為を改めて伝えることは無い。園庭で培われた思いやりが、本園の文化となっているのであれば嬉しい。

75 年前の園庭に関する倉橋惣三先生の理想は、間違い無く子どもたちに遊びを通して学びに向かう力・人間性を養うものであることが再認識できた。



### (2) 次に向かって

全体的な計画は家を作るときの、設計図に相当するものであり、年間指導計画はその仕様書にあたる。理想を具現化するために、指導案の点検は常に行ってきた。今後は、子どもの顔をよく見て、指導案を常に書き換えながら保育を実践することが課題であると思う。

園庭を舞台に行ってきた食育は、畑での栽培を体験の中心に置いてきたことに間違いはなかったと考えている。今後は家庭をさらに取り込んで、子どもたちの家庭もすべて大きな輪の中で、食育を展開してゆきたいと考えている。一例をあげると、これまでは大豆栽培は、枝豆、きな粉、豆腐造りで終わっていたものが、一人の保護者の提案で、白味噌なら簡単にできるという情報を得て、早速食育のメニューに取り込んだ。従来の策を常に点検しながら新たな方向を考えることはPDCAサイクルの基本である。

今後も常に点検を丁寧に、子どもの声を何よりも大切にしたい保育の継続を家庭とともにやってゆく所存である。

### 《参考文献》

- |        |      |                        |         |
|--------|------|------------------------|---------|
| 藤森平司   | 2014 | 「保育としての食育」             | 世界文化社   |
| 鯨岡峻    | 2012 | 「エピソード記述を読む」           | 東京大学出版社 |
| 北野幸子   | 2021 | 「地域発・実践現場から考えるこれからの保育」 | わかば社    |
| 全国保育士会 |      | 子どもの育ちを支える食            |         |